（8）井上宗雄氏の『中世歌壇史の研究　南北朝期』（一九八七年、明治書院刊）を始め、通説は関東在住の廷臣一条能基のこととするが、疑問もある。『公卿補任』によれば、弘安八年の一月二十一日に能基は没しているので、東大本の「弘安九年十二月」はおかしい。

（9）弘安元年に「閏十二月」はない。「閏十二月」があるのは、東大本が言う弘安九年である。

（10）二〇〇〇年、笠間書院刊

（11）注8参照。

（12）『大和物語』の「心を取り」要約したというのか、『大和物語』、もしくはその登場人物が「心劣り」しているというのか、わからない。

（13）片桐洋一所蔵。『伊勢物語古注釈コレクション　第一巻』（一九九九年、和泉書院刊）所収。

（14）注4に同じ。

（片桐洋一）

片桐洋一（かたぎり・よういち）　【編集委員】
1931年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。大阪女子大学名誉教授。主要著書『伊勢物語の研究［研究篇］［資料篇］』（明治書院）『伊勢物語の新研究』（明治書院）『源氏物語以前』（笠間書院）

山本登朗（やまもと・とくろう）　【編集委員】
1949年生まれ。京都大学大学院博士課程単位取得。関西大学教授。主要著書『伊勢物語論　文体・主題・享受』（笠間書院）『日本漢詩人選集・菅原道真』（共著・研文出版）『平安文学研究ハンドブック』（共編・和泉書院）

神田裕子（かんだ・ゆうこ）
1970年生まれ。早稲田大学大学院博士課程単位取得。早稲田大学大学院生。主要論文「河野美術館蔵『伊勢物語註　冷泉流』」（『王朝文学の本質と変容　散文編』和泉書院）「『玉水』の作品研究」（『演劇映像』第43号）「古活字本『謡抄』単辺十二行本の書誌学的研究」（『演劇研究センター紀要』III）

丸山愉佳子（まるやま・ゆかこ）
1976年生まれ。学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程在学中。主要論文「伊勢物語奥書集成稿（一）」（『国文学研究資料館文献資料部調査研究報告』第23号）「伊勢物語享受の実際 ―伊勢物語版本についての報告」（『学習院大学国語国文学会誌』第46号）

伊勢物語古注釈大成（いせものがたりこちゅうしゃくたいせい）　第一巻

2004年（平成16）10月30日　初版第1刷発行©

片桐洋一・山本登朗　責任編集

装幀　右澤康之
発行者　池田つや子
発行所　有限会社笠間書院

〒101 0064　東京都千代田区猿楽町2 2-5
☎ 03-3295 1331㈹　FAX03 3294-0996
振替00110 1-56002

NDC分類 913.32

ISBN4-305-70041-7 C3395
藤原印刷・渡辺製本
乱丁・落丁本はお取りかえいたします。
（本文用紙：中性紙使用）
http://www.kasamashoin.co.jp

2004.7.14
購入

百二十四

第百廿六

一　いかなる事を思けるにやとは、好色、和歌の深義を思へは、我とひとしき人なしと読り。

百二十五

第百廿七

一　男煩てとは、業平煩て元慶四年五月廿八日、五十六にてをはらんとしける時、よめる歌なり。歌に無義。

右、中院殿自筆御本書写、其外可然異説ヲ加へ、伊予守貞世与之。子孫相伝後、為秀卿伝由也。

藤為秀
橘朝臣養父
源朝臣長照

伊勢物語奥秘書

（鉄心斎文庫蔵）

片桐洋一
神田裕子

此歌、させる義なし。つまもこもれりとは、中将を云り。若草は、女の名なり。又つまと云むとて、おけるなり。

とよみけるを聞て、女をは取りて、友にいてゐにけり。

十三

むかし、おとこ（男）むさしなる男、京なる女のもとに　此段、前につゝくからす。男とは、中将なり。女とは、四条の后なり。行平卿のむすめなり。聞ゆれは、はつかし、きこえねは、くるしと　とは、おちとめいとのあひたなれはなり。　かきて、うはかきに、むさしあふみとかきて、のち、音もせすなりにけれは、京より女　むさしあふみとは、はなれぬ中と云んためなり。そのゆへは、むさしあふみは、杢よりあふみまて作りつゝけたるものなり。一説、此むさしあふみの事、武蔵守の近江に在所あり、そこにての事なりとも云説あり。

むさしあふみさすかけて頼にはとはぬもつらし問もうるさし

前の物語の言を以て、心あらはるなり。別に義なし。さすかにかけての、かけてと云字、物と物とも、かくるにはあらす。むさしあふみといふ、縁の言なり。とあるを見てなむ、たへかたき心ちしける。

とへはいふ問ねは恨む武蔵鐙かゝる折にや人はしぬらむ

此返歌の心は、とへはうるさしと云、又とはねは恨むる、か様の中は、かゝる折にこそ、きくもうせぬと云由也。

十四

むかし、おとこ、みちのくにゝすゝろに行いたりにける。そこなる女　みちの国とは、長良卿の許へまいる事なり。其比、大原の奥に、あねはの谷といふ所に住給ふなり。一説、長良卿、此時陸奥守なり。女は、長良卿の御娘、二条の后なり。すゝろに行とは、うかれ行心なり。京の人はめつらかにやおほえけん、せちにおもくる心なむありける。さて、かのおむな、

中々に恋にしなすは桑子にそなる人かりけり玉の緒計

中々、長々、両説なり。桑子は、かいこの事也。玉緒計とは、少しの程なりともと云心なり。此歌の心は、中々に懸なてあらんよりは、かいこのことくにて、珠数一くりの間

とは書つゝけたるとも、前の段には、つゝくからす。二条の后いまた仕へさる以前なり。漸、女御に成給はんなと、ほのめかしき此なるへし。春日野に武蔵と云所あるに依て、武蔵野へ出行とは書り。此武蔵は、『日本記』云、文武天皇の御時、中納言美作（ミマサカ）丹丸と云人、武蔵守なりしか、奈良の京に上て、俄に死する間、春日野にうつむ。後、彼塚震動して、天下の人多く悩（ナヤ）む。人に詫て云、「武蔵国に我執心あり。彼国にて終らんと思ひしに、愛にて終らむ事、心にあらすなり。我をむさしへ送れ。」と云り。其時、宣旨有て、此塚を武蔵塚と名付らるなり云々。ぬす人なりけれは、国のかみにからめられけり　国守とは、守護の事なり。長良卿、大和守になりし時の事なるへし。からめらるゝとは、愛かしこ求尋られし事なり。女をは草むらの中にをきて、にけにけり。みちくる人　草むらの中とは、彼武蔵塚に女をかくし置なり。人も通はぬ所なれはなり。みちくるとは、満来なり。此野はむす人ありとて、火をつけんとす。女わひて、

むさし野は今日はなやきそ若草の妻もこもれり我も籠り

松を二条の后に喩て云なり。させる義なし。人ならはとは、尋常の人ならはと云心なり。既に清和の女御に備るへきなれはと云心なり。此歌は、福丸か歌也。『長能記』云、今此物語の為ㇾ体、上ハ戴ニ『古撰』上哲の歌一、底ハ構ニ『史記』『漢書』之心一、言には、通ニ五常の宗と故語の道一云々。此物語大略、此文の心にて可ニ心得一。大原に、くりはらあねはの谷と云所有。此所も住給しなり。一義、此あねはの本歌、

をくらさき上の小嶋の人ならは都のつとにいさといはましを

依之、是を読か。此松の如く、一人あるならは、都へさそはんと云心歟。又、二心なきといふ心か。一義、此あねはの松の事、陸奥の名所なり。彼国へ行いたると云故に、其国の名所を引出す也。此あねはの松の本説は、藤原綱養父と云人、みちのくの守になりて下りける時、いとけなきむすめを二人、相具して下りけるか、みちの国に十年のとし月をへたりける。其内に、女あねは、はかなくなれり。又、程をへて、都へ上らんとする時、いもうとの女、むなしくなりぬ。然は、あねのはかへ、いとまこひにまいりて、らく涙しける処に、塚の間より、松一本生出たり。常よりも、たをやかに、うつくしき松なり。あやしみて、ねをほりて見れは、あねの首のうははの中より生出たり。是に依て、あねはの松と云を、やはらけて、あねはの松と云なり。といへりけれは、よろこひて、思ひけらしとそいひをりける　よろこひては、悦てなり。詞、皆、此おもむきなり。

十五

むかし、みちのくにゝて　長良卿の御もとなり。なてうことなきとは、やむことなきといふ、同事なり。人の女に、二条の后の御事なり。かよひけるに、あやしう、さやうにてあるへき女ともあらす見えけれは　思へはとて、それによるへき人の心にもあらしと、疑ひ思ふ由也。一義、なてう事なきとは、位高き人の事なり云々。一義、さやうにての意は、位高き人なれは、我物にもゑなるましきと云心なり。

忍ふ山しのひてかよふ道もかな人の心のおくも見るへく

女、かきりなくめてたしと思へと、さるさがなきえひす心を見てはいかゝはせんは　めてたしとは、かやうに中将のよめるを、悦へる由なり。さかなきとは、無礼といふ心なり。ゑひす心とは、色々しき心と云也。一義に云、古注の説、ゑひす意とは、業平の不調なる事を云歟。一義云、ゑひすと云物は、取付てはなれぬものなり。思ひ付てはなれぬを云義歟。いかゝはせん、はの字、別に義なし。只、色々しき人なれは、思ひはなたすは、いかゝはせんといふ心までなり云々。

十六

むかし、きのありつねといふ人ありけり。三世の御門につかふまつりて、時に逢けれと　有常は、名虎か子なり。三代の御門は、（十四代）淳和、仁明、文徳なり。『文集』云、三公逢ㇾ時、栄花既開云々。時にあふとは、栄花のさかんなりし事也。後は、世かはり、ときうつりにけれは　とは、清和の

信夫山といへるは、忍ひて通ふと、いはんためなり。おくといはんにも、縁あるへしにや。別の義なし。